氏　　名	包　周　娜
学 位 の 種 類	博士（歴史民俗資料学）
学 位 記 番 号	博甲第 248 号
学位授与の日付	2019 年 9 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
学位論文の題目	牧畜社会における経済基盤の変化に伴う生活文化の民俗的変容 －内モンゴルにおける半農半牧村落を中心に－
論 文 審 査 委 員	主査　神奈川大学　教授　安　室　　知
	副査　神奈川大学　教授　佐　野　賢　治
	副査　神奈川大学　教授　小　熊　　誠
	副査　愛知大学　教授　周　　星

【論文内容の要旨】

内モンゴルの牧畜民は、歴史的にみて、長い間たえず漢化および農耕化の圧力にさらされ、それに対応して生業形態を変化させてきた。また現代、改革開放政策以降においては、生業経済から市場経済への急激な転換を迫られるとともに、とくに近年は急激な経済のグローバル化の波にもさらされている。そうした現代における定住化と農耕化、共産主義的近代化、経済のグローバル化といった経済基盤の変化が、牧畜民の生活文化にどのような変化をもたらしたか、またそれはモンゴル民俗文化をどのように変容させたかを民俗誌調査をもとに明らかにすることが本論文の目的である。章立ては以下の通りである。

序　章　研究の目的と方法および構成
第Ⅰ部　内モンゴル牧畜社会における経済基盤の変化
　1 章　内モンゴルにおける農業開発とその影響に関する考察
　2 章　内モンゴルにおける「生態移民」環境政策とその影響に関する一考察
　3 章　市場経済化が進む現代牧畜業のあり方
第Ⅱ部　半農半牧村落における経済基盤の変化に伴う生活文化の民俗的変容
　　―生業、衣食住、言語伝承、儀礼、信仰を中心に―
　1 章　家畜飼養と生業
　2 章　衣食住
　3 章　言葉と命名
　4 章　人生儀礼
　5 章　祭祀と信仰
終　章　まとめ

第１部１章においては、歴史文献資料を用いて、調査地であるホルチン左翼後旗における近代以前における漢族移民の流入と土地開墾がモンゴル人社会に与えた影響を生業と生態環境の側面から考察する。

第１部２章では、バイリン右旗の２つの村落を事例として、国家政策として断行された「生態移民」の問題を取り上げる。草原の砂漠化を食い止め退化した自然環境を回復する目的で「生態移民」政策が打ち出されるなか、内モンゴルにおける生態移民の現状を分析し、貧困化などその問題点を指摘する。

第１部３章においては、生業経済から市場経済への転換時、牧畜民がいかに市場経済に適応（または不適応）していったかを考察する。それと同時に、市場経済のもと農牧業の現代化政策について問題を指摘する。

第１部では、内モンゴル牧畜社会の変化を漢化･農耕化といった歴史の大きな流れの中に位置づけるとともに、現代においては改革開放や市場経済化また生態移民といった国家政策との関係からその変化の実像を描いた。それに対し、第２部では１つの半農半牧村落を取り上げて、より微視的な視点に立って、前述のような大きな歴史的変化の中で民俗文化がいかに変容していったかについて、生業・衣食住・言語・儀礼・信仰を中心に記述し考察を加えている。

第２部１章では、ホルチン地域の半農半牧村落における放牧方式の変遷の具体像を明らかにするとともに、伝統的な家畜飼育習俗と現代市場経済との関係を論じる。

第２部２章では、まず食生活について農牧民の日常食と伝統食との関わりを分析する。次いで、住生活に関しては、遊牧から定住化へと移行するなかで、家屋の配置と構造がどのように変化していったか、とくにその移行過程に注目して分析する。さらに、衣生活については、色彩の嗜好・デザイン・素材・消費率の視点からその変化について明らかにする。

第２部３章においては、言葉と命名習俗に関して農耕化や市場経済化がもたらした影響について、①モンゴル語（語彙や文法）の現代化、②モンゴル人名の伝統とその変化、③新たな人名の創出、④モンゴル語地名の伝統と生業との関わり、⑤モンゴルにおける地名の現状と地名保全の動き、という５つの視点で分析した。

第２部４章では、人生儀礼の中でもとくに誕生儀礼・婚姻儀礼・葬送儀礼を取り上げ、Ｉ950 年代から 2010 年代までの変遷について記述するとともに、モンゴル牧畜社会における生命観および死生観の変容について考察する。

第２部５章では、伝統文化としてオボーが復活してきている現状を記録するとともに、それが定住化・農耕化・経済のグローバル化といったことといかに関わるのか、近年の観光化との関係にも注目しながら分析する。

終章は、それまでの議論を総括して、内モンゴルの牧畜社会における生業選択上の生態的論理、および経済基盤の変化に伴う生活文化の変容の特徴とその要因を分析している。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、内モンゴル牧畜社会を中国全体および世界レベルの大きな歴史の中に捉えつつ、一村落の民俗文化がどのように変容したかを対応させているところに論文構成上の大きな特徴がある。その目論見はいわば巨視的視点と微視的視点を融合したもので、それだからこそ、ときに事例提示に終始しがちな民俗文化の変容について、具体的かつ分析的に論じることができたといってよい。

このとき筆者がとくに重視した方法が、日本民俗学が培ってきた方法論であるといってよい民俗誌であった点は注目される。生活文化の全体像を記述する民俗誌調査を現代の内モンゴル牧畜社会研究において導入し、村落レベルのこれまでにない詳細な民俗誌を作製していることは特出すべきであろう。そうした詳細な民俗誌を作製したからこそ、第 1 部でおこなった市場経済化や生態移民のような国家政策、経済のグローバル化といった大きな歴史の中に対応させたとき、新たな問題の発見に繋がったと評価される。

その結果、本論文では、内モンゴル牧畜社会における民俗文化は、一様に変容するのではなく、①伝統的と認識される牧畜文化、②漢民族的な農耕文化、③新たに創造される文化、という 3 つの側面を合わせ持っており、それがさまざまに組み合わされることで多様な変容のあり方が認められることを明らかにしている。これまでも市場経済化や生態移民のような国家政策が、内モンゴル牧畜社会に与えた影響に関する研究は比較的多く見られるが、それと一村落で進んだ民俗文化の変容とを関連づける研究視角は新鮮である。

さらに、現在の内モンゴル牧畜社会における民俗文化は、近代以前においては漢民族からの影響、共産革命以降には国家政策による影響、そして 2000 年代以降には急速に世界レベルで進む経済のグローバル化による影響に接して、そうした多様な影響を「伝承」「吸収」「創造」した結果であるという指摘は重要である。具体的な民俗文化に照らすと、衣食住・人生儀礼・年中行事においては文化の「伝承」「吸収」「創造」が同時に起こっているのに対して、生業では文化の「伝承」「創造」が選択され、また信仰では文化の「伝承」「吸収」が強くみられるという。こうした分析も詳細な民族誌調査が基礎にあるからこそ説得的であると評価される。

民俗誌調査は本論文にとって特色を示す重要な調査法であり、それが分析の確度を上げていることは確かだが、ただまだその内容には若干の精粗がある。生業や衣食住、儀礼については詳細な記録がなされるが、信仰についてはまだ調査データが不足している部分がある。今後も引き続き、信仰に関しては調査資料を補完することで、民俗誌としての完成度を上げてもらいたい。それがなされれば、本論文は現代の内モンゴル牧畜社会を記録した民俗誌としても、高い存在価値を持つものとなろう。

以上、本論文は神奈川大学歴史民俗資料学研究における博士論文として大きな成果をあげ、高度な水準を達成したものと評価できる。審査委員一同は、本論文が博士（歴史民俗資料学）に相応しい水準にあると認めるものである。